

## ジェイムズ・ステュアート研究の現在

渡 辺 邦 博

0. はじめに
1. 拙著の概要
2. 小林昇教授のステュアート研究
3. 拙著の特徴
4. おわりに

### 0. はじめに

大学の存在意義が問われる現在、本学学会機関誌の『産業と経済』もその大きな波を受け、最近数年間の原稿集まり状況には目を覆うものがある。これは、新制大学発足以来登場した大学機関誌ないしは学会誌の鼎の軽重が問われている現象とも考えられる。そもそも大学の数自体が数えるほどしかなかった第二次世界大戦以前には、公私を問わず社会科学系の雑誌の数も少なく、その投稿内容も専門性が高かったが、新制大学設置以来、各大学の研究成果発表の機会提供のためにスタートしたいわゆる学内誌は、日本経済の成長にともない増加した新制大学の設置数に歩調を合わせ、一面で研究者の自由な成果発表の場所を提供してきた。しかし、おそらく1980年代以降と思われるが、こうした学内誌の量的な増加が必ずしもその質的内容を伴っていないとの認識からか、大学機関誌にもレフェリーを起用する制度が採用されたり、さらに細分化・専門化した全国的規模での学会に論文の掲載を提供する学会誌（これまでの学内学会誌とは区別される）が登場して、研究成果の公的保証も実現するに至った。研究者にとって、研究の公認の成果発表の機会が提供されるようになったのである。しかし、その反作用として、学内研究学会の機関誌が「同人誌」だとの偏見も生ずるに至った。研究成果の生産は、必ずしも工業製品の生産のように、計画的・均質に進行するものではないので、画一的な基準をこのように当てはめることは、研究なるものの本質が理解されていないと言わざるをえない。

いずれにしても学内機関誌の原稿提出の滞りは、本学固有の事態でもない。仔細な分析を待たなければならないが、学内研究雑誌の原稿遅延には、一筋縄では律することができない知識社会学的な諸原因があるだろう。研究者の世代交代、学問の枠組みの転換、研究成果の発表に対する状況の変化（その一端が学内雑誌の昨今の有り様であろう）、少子化に伴う大学環境の激変、とりわけ研究者の学内雑務への埋没、専門研究者としての自覚ないしは決意の希薄化、研

究者養成過程の変質なども列挙できる。

本学の場合には、経済・経営・法の既存学会の継続（経済経営学会と法学会）と新学会（社会科学学会）の発足の二本立てもその原因かも知れない。高等教育機関である大学の存亡と勝るとも劣らない重要な要素として、学内学会の活動とその具体化としての学内学会誌の維持に全力が投入されなければならない。筆者がここに、異例の論文を掲載するに踏み切ったのも、筆者なりの決意の結果である。

さらに、1987年に創設された奈良産業大学の最初の学部経済学部は、来春2010年に事実上最後の卒業生を送り出すこととなった。私は、ここに惜別の意を込めて本稿を草するものである。

## 1. 拙著の概要

さて、拙著『ジェイムズ・ステュアートとスコットランドーもうひとつの古典派経済学ー』（ミネルヴァ書房、2007年刊）公刊以来、2007年8月経済学史研究会の夏合宿・発題：奥田聡氏、2007年10月社会思想史学会大会「ヒュームとスミスの会」フォーラム・発題：古谷豊氏、2008年3月本誌『産業と経済』22巻3・4号に投稿された大倉正雄氏による書評、などにおいて内在的なご批判・ご批評を賜っているが、まず拙著の概要を示すことから始めたい。

拙著の大意は、以下の3つの部分に分けられる。

- i) 書き下ろしの第1章「ジェイムズ・ステュアートの生涯と著作」と、『コルトネス文書』について」と題する第9章を主要構成部分とするステュアートの伝記的・資料的研究。巻末には、ヒュームやスミスの同時代人としてのステュアート像の提示するために必要な地図や系譜図を付した。

### 第1章「ジェイムズ・ステュアートの生涯と著作」

文字通り「ブリテンにおける経済学の父」ジェイムズ・ステュアートの生涯と著作を、『コルトネス選集』（1842年）や『コールドウェル文書』（1854年）などを援用して、ヒュームやスミスの同時代人であることを示す努力を行った<sup>1</sup>。

### 第7章「アダム・スミスとジェイムズ・ステュアート」

イアン・ロスの新著『アダム・スミス伝』（1998）からステュアート関連事項を析出して、ステュアート研究のヒントを得ようとした。この章は、ステュアートとスミスを論じたものであるが、今からおよそ100年前に出版された定評あるジョン・レーのスミス伝を超えるべく出版された、ロスの新スミス伝をある夏休みに読み進めるにしたがって、これまで「抽象的対立」関係にあると言われてきた両者が、当然のことであるが重なる

<sup>1</sup> 「ブリテンにおける経済学の父」とは、スコットランドの人名辞典における文言から、19世紀スコットランドにおけるステュアートのひとつの評価として、本書でも採用したものである。

シーンをかなり有することが著者に確信され始め、両者に共通する人物群、逆にそうでない人物群を構想することによって、ステュアート研究にいつそう具体的な背景が浮かび上がってくるのではないかと考えるようになった。第1章を構想したのも、ロスの仕事に啓発されたと言う面を持っている。

### 第8章「バハン伯のステュアート伝」

ステュアートの妹アグネスの長男、デイヴィッド・ステュアート・アースキン＝第11代バハン伯は、ステュアートの甥にあたる。その甥が、ステュアートの死後比較的早く、ステュアートの伝記を公刊した。同時代人の証言として、伝記的な事実を超える史料の価値を持つものと考え、史料考証の上、本章に採録した。

### 第9章「ステュアート研究に関する文献調査」

ジェイムズ・ステュアート研究に関する第一次資料『コルトネス文書』に関する調査を、筆者がスコットランドを訪問した1993年に行なった。グラズゴウ大学のアンドルー・スキナー教授のお世話でエディンバラ大学スペシャルコレクション・ルームを訪ね、エディンバラ南方のおそらくピーブルズに居住するこの文書所有者からエディンバラ大学に寄贈されたばかりの、ステュアート家に伝えられたドキュメント類を短期間で探索したのがその内容である。その中には、最近、奥山忠信・古谷豊氏によって復刻・翻訳されたステュアートの貨幣論も含まれていた。この文書についての本格的な研究とは言えないが、現段階でも類似するものがないので本書に収録した。ステュアートについての本格的な伝記はもちろん、彼に関する立体的な研究もこれを中核に行われるべきであることを強調しておきたい。

## ii) ステュアートの晩年論考1 ラナク州の運河交通問題

### 第2章「スコットランドの経済発展とジェイムズ・ステュアート」

ここでは、ステュアートが、主著『経済の原理』（1767年）公刊直後、スコットランドの経済問題に対する処方として、自らの学説を親しみやすい文体で匿名で公にした『ラナク州の利益』（1769年）に関する先行研究、S.R.SENと田添京二をサーベイし、この小冊子のテキスト・クリティークをも行なった。

### 第3章「スコットランドの運河開発と内陸道路建設」

前章に引き続いて、ここでは、ジョージ・チャーマーズによってはじめて「発掘」された、ステュアートの匿名の小冊子『ラナク州の利益』が、ステュアートの経済理論形成史上に持っている位置を確定し、価格決定論について『原理』第2版を先取りして世に問う意味を持っていたこと、さらには、『原理』の応用として、スコットランド経済開発をめぐる穀物調達問題に対して、運河建設による水運か、内陸道路網の整備をとるべきか、と言う二方策を対比して、後者を推奨した、と主張した。

## iii) ステュアートの晩年論考2 蒸留業問題

## 第4章「スコットランド蒸留業をめぐる1779年の新聞記事」

## 第6章「地方新聞の蒸留業関係記事とステュアート」『クーラント』10月4日号の紹介

## 第5章「『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』におけるステュアートの蒸留業論」

以上の3章においては、ステュアートが、スコットランドの新聞『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』に匿名で寄稿したスコットランド蒸留業をめぐる記事について2つの課題を持っていた。第一は、この記事がステュアートの手になるものかどうかと言う、文献考証問題があった。第4章では、ステュアートの先駆的な研究者ポール・シャムレーが発掘した『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』9月27日号の記事を紹介した。第8章「バハン伯のステュアート伝」を採録した意味の一つは、ステュアートの同時代人によるその伝記を復刻することにあったが、いまひとつは、この蒸留業をめぐる記事問題の解明にとって、必要な推定根拠を提供していると考えたからでもあった。この瑣末な問題について、エディンバラのいくつかの図書館を利用して、『クーラント』の当該号前後を探索し、さらには『コルトネス文書』や『チャーマーズ文書』をも参照しなければならなかったが、そのことを通じて、スコットランド蒸留業をめぐる『クーラント』誌上のいくつかの記事の中で、ステュアートが投稿したものは、1779年10月4日の記事であろうとの結論に到達した。

第二は、ステュアートのこの記事がいかなる主張を行ったかと言うことである。この記事をはじめととりあげたシャムレーは、この記事が持つ意味を、麦芽税の引き上げをとまなう関係法案に対して、スコットランドのフリーホルダーたちが軽挙を行わないよう戒めたものだとして解釈している。シャムレーはこの場合、この記事をかきのぼる約34年前の反乱に対するステュアートの加担を意識し過ぎていると思われる。確かにこの記事は、大規模蒸留業者による独占の可能性にも否定的であるだけでなく、課税法案の実効性についても疑念を示しているが、重要なことは、この税が小規模蒸留業者の営業活動にとって抑圧的効果を持ち、この者たち間での「インダストリ」が削がれてしまうことに警鐘を鳴らしていることであって、蒸留業に対する彼の見解も、未だに発見されていない、彼以外の関係者の見解も合わせた上で、確定されるべきではないかと考えたのである。

以上簡単に拙著の概要を示したので、次にわが国におけるステュアート研究史を概観して、その研究史上の位置付けをしたい<sup>2</sup>。

<sup>2</sup>以下に紹介する小林昇教授のステュアート研究が、いわばわが国の研究の本流を構成しているが、稿末資料1の研究年表で網掛けを施した以外の、あるいは小林以降の研究については、本稿では省略する。以下の文献を参照されたい。ヤン(1994)については、経済学史学会年報35、1995年に奥田聡の書評がある。大森(1996)については、同じく年報35、1997年に拙稿、1995年のグルノーブル・ステュアート・コック寄稿文集=トルタハダ(1998)については、同年報38、1998年に飯塚正朝の書評がある。

最近の研究で指摘すべきは、奥山+古谷(2004&2006)であり、それらは『コルトネス文書』所収のステュアート貨幣・信用論の復刻である。

## 2. 小林昇教授のステュアート研究

すでに学会において、いく度かにわたる学会展望が行われている<sup>3</sup>ので、以下では網羅的なものではなく、この研究を中心に牽引してこられた小林昇教授（以下敬称を略する場合があります）の研究をスケッチすることにしたい。

別途資料1「ジェイムズ・ステュアート研究史略年表」を参照していただきたい。古典派や、マルクス、あるいはケインズと言った研究テーマとは異なり、ステュアート研究自体が、経済学史研究の盛んなわが国においても、本格的な研究として行われるようになったのは、第二次世界大戦以後のことに属する。

略年表には、ステュアートに関する研究書ならびに関係論文、さらにステュアート研究をリードして来た小林の関係書を列挙した。年表上で網掛けを施した部分の小林によるステュアート研究を整理すると、以下のような3つの段階に分けるのが可能である。

### i) 『重商主義の経済理論』（1952年）段階

もともと福島高等商業学校においてフリードリッヒ・リストの研究（『フリードリッヒ・リスト序説』1943年）から出発した<sup>4</sup>小林は、1944年から46年までの応召後、新制福島大学経済学部で研究を再開し、1950年頃（「比較的早く前掲のJ・ステュアートの『経済の原理』に接するようになり、やがてこの大体系に深入りしていった。ステュアートとのこのかかわりも久しく、すでに40年になる。」「ステュアートの大冊は稀観本であるから、わたくしはこれを、当時東北大学の教授に転じて福島から仙台に通っていた、熊谷尚夫をつうじて貸し出してもらった。」「この古典にかんするわたくしの最初の立言は、50年3月に発表した「重商主義の貨幣理論」に示されている」<sup>5</sup>）ステュアートの研究を開始した。

小林も過去を振り返って言うように、「ベルリンの壁の崩壊に至るまでは、学史学会では、マルクス理論の勢力が大きく、スミス以下の古典学派研究の領域でもこの点は同様であった」<sup>6</sup>から、小林のこの頃のステュアート論もその例外ではないが、「当時の学史研究者としては、熊谷との交友のなかで比較的早くケインズを読んだ一人であって、ケインズをくぐっ

<sup>3</sup> 渡辺邦博「ジェイムズ・ステュアート—課題と展望—」、経済学史学会編『経済学史—課題と展望—』（1992）竹本洋「ジェイムズ・ステュアート研究をめぐって」（1992）同上  
大友敏明「ジェイムズ・ステュアート研究の現段階」、経済学史学会年報35号、（1997）  
竹本洋「J・ステュアート研究の成果と展望」、経済学史学会年報39号、（2001）  
などを参照。

<sup>4</sup> 小林昇の経歴と主要著作については、『歴世—小林昇全歌集—』（不識書院、2006年）、506-7ページを参照した。同書、461-464ページのステュアート国際会議を詠んだ含蓄あふれる歌の数々をも参照。また、竹本洋「小林昇の戦争体験と戦後非啓蒙の一つの基点」、経済学論究（関西学院大学経済学部研究会）62-2、2008年9月をも参照。

<sup>5</sup> 小林昇『経済学史春秋』未来社、2001年、155-5ページ。

<sup>6</sup> 小林昇『経済学史春秋』同上、2001年、196ページ。

た目をもつ者として、『原理』はきわめて興味深く、またかならずしも難解でもなかった<sup>7</sup>と証言されるように、ほぼ同時にステュアート研究を開始した田添京二とは、ニューアンスを異にする。

『重商主義の経済理論』の主要部分を成す「ジェイムズ・ステュアートの経済学説—重商主義の理論体系—」の目次を参照すれば明らかのように<sup>8</sup>、初期モネタール・ジステムの理論的代表者としてのステュアートの歴史的観点に注目し、ステュアートが把握した貨幣の形態と流通法則を、マルクスとケインズに導かれつつ、明らかにする、との視点が貫かれている。

当時、経済学史学会がわが国の研究環境改善のために提供しつつあった、ステュアートの『原理』をも含む経済学古典の復刻も、未だ開始されておらず<sup>9</sup>、この研究は、東北大学所蔵の『原理』初版に依拠しながらの、原典密着型の研究スタイルでの所産であったと言える<sup>10</sup>。

## ii) 「ステュアート・スミス・リスト」(1966年)段階

この「ステュアート・スミス・リスト」は、もともと『古典経済学の伝統』(大河内一男先生還暦記念論文集、Ⅲ、有斐閣、1966年8月)に寄稿された論文であったが、翌1967年英訳され、James Steuart, Adam Smith and Friedrich List(The Science Council of Japan)として、広く海外に知られるに至ったものである。

これは、後に『小林昇経済学史著作集V—J・ステュアート研究—』(未来社、1977年)の最終論文に採録されたが、この巻の目次を参照すれば、第一期に小林と同時にステュアート研究論文を発表した田添京二との論争において深められた『経済の原理』第1・2編理解を含み、さらに『原理』第3編の貨幣制度論にまで研究領域が拡大しており、この段階でのステュアート理解の総論とも言えるのが、「ステュアート・スミス・リスト」となっているのが分かる。

<sup>7</sup> 小林昇『経済学史春秋』同上、2001年、156ページ。

<sup>8</sup> 目次は、『小林昇経済学史著作集IV—イギリス重商主義研究(2)—』未来社、1977年刊によっている。その研究は、序説「学史上のステュアート」に始まり、前篇が『原理』第一編の分析、後編が『原理』第二編の分析に充てられ、『原理』の全編に及んでいない。(『小林昇経済学史著作集IV—イギリス重商主義研究(2)』、254—55ページ)

<sup>9</sup> 経済学史学会が、その事業の一環として1955年以来、ペティ、ステュアート、スミスの原典を復刻したが、ステュアートの『原理』は、ようやく1957年に写真復刻の実現をみた。経済学史学会編『経済学史学会30年史』、1980年、60ページ。

<sup>10</sup> 当時(小林昇編『イギリス重商主義論』御茶の水書房、1955年の中で)小林教授自身が、諸文献の入手に困難をきたすけれども、ようやく「マイクロ・フィルムを送らせる便が開けた」(『小林昇経済学史著作集Ⅲ』、1976年、あとがきに再録)と、研究環境について解説を行っている。また、内田義彦は、小林教授が1952年に公刊した『重商主義の経済理論』について、「中立貨幣か安定貨幣と言うケインズのアプローチに制約されて」いる、と翌1953年に出版された『経済学の生誕』で、苦言を呈している。同書、8ページ。

この段階での小林のステュアート理解は、『原理』第4・5編の分析にも部分的ながら手を伸し<sup>11</sup>てはいるが、『原理』の到達点は、『国富論』の出発点『国富論体系の成立』（未来社、1973）と把握しており、わが国における戦後の古典派、ないしは学史研究の典型的理解を示したと言える。

この段階での小林は、ヒューム、ステュアート、スミスの近代社会に関する共通認識として、自由な労働による商品生産と、この労働がもたらす剰余の各生産者への帰属（富裕と豊富の経済学）を構想したととらえ、一方で、ヒュームとステュアートは、原始的蓄積過程を理論化した。スミスは資本制蓄積過程を理論化したから、資本主義分析の学としての経済学が『国富論』から始まるとするならば、スミスは「経済学の父」であると考えている。

ただし、上記の言わば段階認識を前提としながらも、ステュアートには深い「貨幣的経済学」の領域があり、スミスはこの側面を無視して、ステュアートを正当に継承できなかったから、両者は、「抽象的対立」関係に終わったと主張するのである<sup>12</sup>。

iii) 『小林昇経済学史著作集X—ジェイムズ・ステュアート新研究—』（未来社、1988年）から『最初の経済学体系』（名古屋大学出版会、1994年）段階

ステュアートを冠した著作を公刊しておよそ10年後に出版された著書において小林は、従来の原典精読型から、いくぶんスタイルを変化させた。この「ジェイムズ・ステュアート新研究」に収録された論文を、『経済の原理』各論、学史的・伝記的研究、書評、ステュアート体系の総体的な位置付け、に分類しても許されるだろう。特にこの時期には、学史的・伝記的な労作が多くなったことに注目したい。（以下の下線を施した論文がそれにあたる。）

#### 『小林昇経済学史著作集X』の目次

「最初の経済学体系」、「マルクスまでのステュアート」、「ステュアート経済学における歴史主義」、「ステュアート『経済の原理』の成立事情」、「『原理』におけるインダストリについて」、「ステュアート信用論の構造」、「ステュアートの見たジョン・ローのシステム」、「ステュアート租税論の基礎的考察」

#### 『小林昇経済学史著作集XI—経済学史新評論—』（1989年）の目次

「マルクスにおける『国富論』前史」、「『初期イギリス経済学古典選集』の解題」、「ポリティカル・エコノミーの射程」、「ヘンダーソンのリスト伝によせて」、「スイスのリスト」、「フリードリヒ・リスト『世界は動く』」、「日本におけるリスト研究」、「J・ステュアートのポリティカル・エコノミー」、「経済学と後進国」、「古典経済学における原蓄の問題」、「原蓄の中の保護主義」、「20世紀のステュアート」、「小編、内田義彦『作品としての社会科学』」、「マルクスと重商主義文献」、「大河内一男先生とわが国の経済学史研究」

<sup>11</sup> 『小林昇経済学史著作集V』1977年、「あとがき」492ページ。

<sup>12</sup> この部分、注3に挙げた竹本(2001)を参考にした。

この段階で小林の『原理』分析の目は、『原理』の全巻にまで及んだので、ステュアート経済学の「総体的把握を目ざす一つの範例」竹本（1992）と評価される<sup>13</sup>。

さらに小林の立場をみると、旧説を保持しながらも、微妙な変化もある。

たとえば、「最後の重商主義者とされたステュアート像を、最初の経済学体系の創設者ステュアート像にかえ」<sup>14</sup>た。「モンテスキューの学問世界からポリティカル・エコノミーをはじめて分離して構築した」<sup>15</sup>などを参照されたい。若干立ち入ると、

ステュアートもスミスも、生産者大衆の富裕化の時代を共有しているが、前者が原始的蓄積の一般理論、後者が資本主義的蓄積の理論とする点では第二段階と同じだが、『原理』は「小商品生産の一般理論」と規定するのが適切とする判断が新たに付加された。また、原始的蓄積の一般理論としての『原理』が、資本主義的蓄積の理論である『国富論』によって乗り越えられたとの見解から、蓄積様式の理解の相違はあるものの、富裕の経済学としてステュアートとスミスの共通性に強調点がおかれるようになった。そのことから、両者が、「経済学の初期の二大体系」と理解され、刊行年がスミスの『国富論』よりも早い『原理』が、「最初の経済学体系」（1994年に出版された小林教授の著書名）の資格を持つとみなされることになったのである<sup>16</sup>。

この段階での小林の2つの特徴、『原理』をもって「最初の経済学体系」と位置付けること<sup>17</sup>の意味を深めること、広い意味でのステュアートに関する伝記的・書誌的研究を継承することが、後進に託された課題と考えるのである。

### 3. 拙著の特徴

さて、上記のような研究状況の中で、私の著書の位置づけを行う段取りが整ったが、私がステュアート研究に手を染めてからの業績目録（資料3）を参照していただきたい。アンダーラインを付けたものを中心に今回の書物を作成したが、ステュアートに関するものであっても今回利用しなかったものには☑を入れておいた。

それをさらに分類したものが、資料2である。そのうち、◎を付したものが、今回の書物のベースとなったものであり、○を付したものは、ステュアートに関する論文ではあるが、直接には今回の書物の構成部分とはなっていない。

<sup>13</sup>竹本（2001）また、1995年に開催されたグルノーブルでのステュアート・コロクでは、私が小林の研究史をスケッチして、同様の位置づけを報告した。

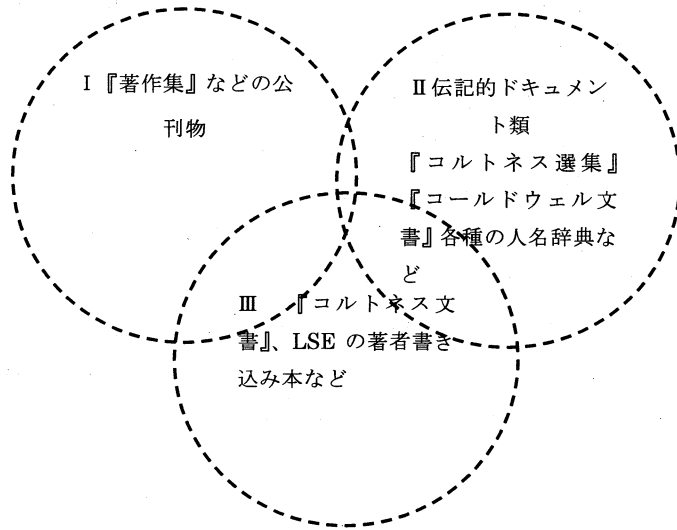
<sup>14</sup>小林『経済学史春秋』2001年、202ページ。

<sup>15</sup>小林『著作集X』1988年、12ページ。

<sup>16</sup>こうした小林の位置づけを継承したのが、竹本洋・大森郁夫両氏のステュアート研究である。

<sup>17</sup>経済学体系の成立問題については、山崎怜「経済学の生誕と成立について」（岡山商科大学、『岡山商大論叢』39-1、2003年6月）、同「経済学の《《成立》》問題」（岡山商大社会総合研究所報24、2003年10月）を参照。





今仮にステュアート研究に関する第一次資料を図のように整理できるとする。(この場合、第一次資料とは、原則としてステュアート没後で、彼の末裔たちが活躍した19世紀半ばを下限とする) 3つの集合の重なる部分が『経済の原理』に収斂するジェイムズ・ステュアートの核心と考えてもよいだろう。

小林昇のステュアート研究は、前節に略説したように、第3の時期になって幅広く拡大するが、まさにステュアートの主著『原理』を中心として行われてきたし、小林に続く研究者もまた、『原理』の学史上の位置づけを念頭において努力を継続してきた。拙著が、ステュアートの主著『原理』への言及がないとの各方面からの御批評は、誠に当然のご指摘であって、筆者の今後の努力はこれのご期待に添うべく精進を続けることでなければならない。その上で、私の研究をあえて対比して言えば、『原理』の周辺、ないしはその背景に関する研究であることができる<sup>18</sup>。

すなわち、前節で指摘された小林(1988)以降のステュアート研究の二つの方向、『原理』に対する鳥瞰図の登場を前提とした研究の可能性＝『原理』理解の深化と、『原理』以外への拡大のうち、私の研究は第二の類型にあたることになる<sup>19</sup>が、さらに自著の特徴を列挙することにしたい。

私がステュアートについて今回の書物の第2章の原型とも言える、最初の論文「サー・ジェイムズ・ステュアート『ラナーク州の利益に関する諸考察』について」を書いた<sup>20</sup>のは、1986

<sup>18</sup>大倉正雄氏による拙著に対する書評を参照。『産業と経済』22-4、25ページ。

<sup>19</sup>竹本洋(1992、p. 53)における立言「なお本格的研究の緒についた段階であり、問題関心と専攻を異にする研究者が開拓すべき余地は十分にある」を参照。

<sup>20</sup>その後、この『ラナーク州の利益』を二度にわたって翻訳を試みた。それが、⑨と⑬である。

年のことであった<sup>21</sup>。前述のように、わが国のステュアート研究史をスケッチしてみると、私のスタートは、小林の第3段階に重なっていたことになる<sup>22</sup>。今少し言えば、意識的ではないにせよ、『小林昇経済学史著作集X』の影響を受けていたとも言えるかも知れない。

上記のような私のステュアートに関する最初の論文発表以降の蝸牛の歩みを略説すると、大阪の研究者を中心とした「古典読書会」が発足し、カンティロン、ジョン・ロー、ローダーデイルなどを経て、ステュアートの『原理』第1・2編を輪読し、まだ邦訳に手がつけられていなかった『原理』第3編の翻訳に私も参加することになった。これは、1988年から91年まで『大阪経大論集』に共同訳が掲載され<sup>23</sup>、そのうちに研究会を主宰されていた竹本洋氏の仲介で『原理』全編の本邦初訳の話が始まった。この仕事を激励すべく、竹本氏は明治の初めにスミスの『国富論』が邦訳されたことに例えられたのを記憶している。これは、ある事情で、当時邦訳

<sup>21</sup>若干立ち入ると、私が大学に入学したのは、1969年のことであって、この年は日本の大学開闢以来の事件として、東京大学の入学試験がいわゆる大学紛争によって実施できず、その他の全国の大学でも同様の混乱が見られた。私の場合も、試験前日になっても試験場についての通知が明確でなく、ようやく実施となったそれも、3日間の予定を2日に短縮して行われるようなありさまであった。試験当日は3月には珍しく大雪となり、大阪市の国際見本市会場で、受験票を提示してやっと入場したのを記憶している。3月末に合格通知を受け取ったが、4月には入学式も実施されず、半年の間は、封鎖の中で開催された各種の自主講座で難解な古典をひも解いたり、大学からは基礎ゼミと言う名の少人数による寺子屋式のケアがあっただけで、10月になって封鎖が解除され再開されたが、授業にもおそるおそる出たようなことであった。その経験以来、セレモニーなるものには、一步引いて臨む習慣がついてしまった。学校と言うものは4月から開始されるのが当然だと思っていた私には、1969年後半が不自然で、翌年4月から2回生としての授業が開始されるまで、落ち着いて教室に着席する気にもならなかった。しかし、2回生になってからは、いくつかの教室で独特の緊張した講義を受けることができた。その頃指定されたり、自分では理解できないなりに取り組んだりした書物として、

内田義彦『資本論の世界』(1966年)、伊東光晴・佐藤金三郎『経済学のすすめ』「付録 対談 経済学のすすめ」→「古典に学ぶ」+「マルクス経済学に学ぶ」+「近代経済学に学ぶ」(1968年)、平田清明『市民社会と社会主義』(1969年)、内田義彦『社会認識の歩み』(1971年)、大河内一男編『国富論研究Ⅰ-Ⅲ』(1972年10月から12月までに出版?!)、『週刊東洋経済』臨時増刊『国富論200年特集』特別鼎談「私たちのスミス研究」1976年2月(内田義彦、小林昇、水田洋) アダム・スミスの会編『増補版本邦アダム・スミス文献』(1979年)

などを挙げるができる。伊東光晴+佐藤金三郎共著の書物の末尾には、いわば学習ガイドがあって、経済学を学ぶものは、まず古典をしっかり踏まえるべきであり、その後古典派を学び、最終到達点としてマルクスの線が引かれていたが、ケインズに代表される近代経済学も、勉強すべきものとされていた。当時の経済学部では、経済原論が末永隆甫、佐藤金三郎、経済学史が眞実一男、近代経済学史が非常勤の玉井竜象、西洋経済史が川久保公夫と安部隆一、日本経済史(論)が山崎隆三と小野義彦などによる競争講義であったが、経済学と言う学問にとって古典の意味は、現在とは大きく異なる位置付けを与えられていたと思う。その後、大学院に進学してから目にするようになった、古典派経済学研究をリードしていた内田+小林+水田鼎談は、アプローチの相違も含めて、未だに糧となっている。当時の私は、その後ステュアート関係論文を書くなど夢想だにしかたが、研究者を志した動機にはある種の時代精神があったと考えている。その一端を物語るものとして以下の2点を挙げておく。吉村勤「一大学人の悩み」『月刊エコノミスト』1973年12月)、佐藤金三郎『マルクス遺稿物語』岩波新書、1989年。

<sup>22</sup>今少し大学院生の頃の諸事情に触れると、経済学史学会がその事業としていく度かに分けて行った経済学古典調査(「本邦における経済学の古典の調査および研究」代表久保田明光、第一期昭和27-29年、第二期昭和39年-41年、その後不詳、経済学史学会編『経済学史学会30年史』、1980年、58ページ参照。その成果は、MATSUDA Hiroshi, A Catalogue of Western Economic Literature in Japanese Universities 1501-1700, Maruzen, Tokyo, 1995.に具体化している。)をお手伝いすることがあり、福田徳三の文庫を探索する機会があったこと、また関西学院大学で1981年以來、旧堀研究会を継承して開催されて来ている経済学史研究会、第24回(1984年8月)で、「ゴールドスミス=クレス文庫を使ってみて」と題する報告を行っていることなどが、その後の私の研究の枠を形成しているようにも思われる。

<sup>23</sup>①がそれに相当する。

がなされていかった『原理』の第4・5編を先行させると言う変則的な形態をとることとなり、小林昇先生の数度にわたるご校閲を得て、まずは1993年に名古屋大学出版会から出版されることになった。その間私は、⑬、⑭、⑮、⑯などの書誌的研究を継続しており、研究資料の収集と視角の拡大を考慮して、本学学会からの補助金を得て、1993年夏グラーズゴウ大学のアンドルー・スキナーを訪ねることにした。私のこのスコットランド訪問は、学史研究の広義のバックグラウンドを考えるまたとない機会となった。この時、前述の『原理』の翻訳が大詰めを迎えており、名古屋大学出版会の翻訳には、著者の署名をとの方針があつたらしく、スコットランドからステュアートのサインのコピーを日本に送付する一幕もあった。スキナーは、入手したばかりのステュアート晩年のアメリカ問題に関する9通の書簡を検討した論文とその資料を提示してくれたし、エディンバラでのステュアート関係草稿類＝いわゆる「コルトネス文書」を閲覧する便宜を図ってくれた<sup>24</sup>。またその折、翌々年のステュアート関係国際会議の情報をも知らせてくれた。前後するが、本学の『産業と経済』が、大学創立10周年記念号を計画して、私は⑳を寄稿していたので、スキナーが私に告げたステュアート関係国際会議が1995年にフランスのグルノーブルで開催される年になると、水田洋先生から報告するように促され、㉑を読むことになったのは、予想外のことながら、幸運なことであった。その年には、ジュネーヴからグルノーブル入りして、ヴィズィル城で水田先生や小林昇先生と合流し、韓国のヤンとも親交を始めることが出来た。何よりも第一に、注の4で触れた小林先生の歌集『歴世』463ページの第4歌のシーンを目撃したにもかかわらず、写真に撮影できなかったのを悔いている。このコロックの報告集がトルタハダによって1999年に公刊されたし、その折私の持参したステュアート関係ビブリオは、㉒にも収録された。この頃スキナーは、『経済の原理』のヴェリオロム・エディションを企画していたが、それは水田・小林両先生のご協力も得て、1998年にピカリング・アンド・チャトーから出版された。それに対する私の考えは、㉓に簡潔ながら発表している<sup>25</sup>。この書評によって私は、拙著253-254ページにも述べたが、はからずも経済学史研究の「環境変化」を自覚することとなった。

私事にわたることだが、ステュアート・コロックの直後に比較的短期間、以前から患っていた病気の治療を要することになり、その後間歇的にこれに悩まされることになったが、2000年前後に小康状態となり、ゆっくりではあるが研究を進めることとなった。それには、1995年に出版されたイアン・ロスの『アダム・スミス伝』を精読したことが少なからず力となった。拙著250ページにも記したが、拙著第1章を構想したのは、ロスの検討を経験したからである。この作業の一部は、後に㉔として具体化したし、2002年12月、福井県立大学で開催された経済学史学会関西西部会で報告の機会を得た。1999年には、結局締切が来ても踏み切ることができな

<sup>24</sup>この時の成果の一部が、㉑となり、拙著の第9章を構成している。

<sup>25</sup>小林昇「James Steuart, An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy (1767) のvariorum editionの刊行について」、『経済学史春秋』2001年、41-72ページを参照。

ったが、学内学会の制度を利用して、一旦研究をまとめようとした。死児の齢を数えるに等しいことだが、末尾にその折の資料を添付している<sup>26</sup>。

21世紀になってからは、書物の完成に焦りを覚えたが、諸事情によって、2004年春までこれを延期せざるを得なかった。拙著の第1章に相当する部分は、本学部の創設当初からあった学内出版助成制度にトライした段階で、かなりの量まで出来上がっていたのだが、それ以上新たに稿をおこすことなく書物に作り上げるとの方針に落ち着くことになったのである<sup>27</sup>。

少し弁解してみたので、小林の第二の方向と位置付けられる拙著の特徴を具体的、かつ簡潔に述べたい。

先に掲載した図を援用するのが便利である。まず、第一の集合、ステュアートの公刊物。ステュアートの全6巻からなる『著作集』(*The Works Political, Metaphysical, & Chronological, of the late Sir James Steuart of Coltness, Bart, in 6 vols. London, 1805.*)が19世紀の初頭に出されたのは、ステュアート研究にとって幸いであったと言う点だけでなく、経済学と言う学問分野の認知が、19世紀の前半になってはじめてであったのだから、またアダム・スミスの『著作集』もD.ステュアートによる5巻本が1811-15年にかけて出版されたのだから、今なお無名に近いステュアートの『著作集』が1805年に出たのは、僥倖とも言える興味を惹く問題である。この『著作集』については、『経済の原理』の事実上の第二版をはじめ、拙著第2・3章で取り上げた『ラナク州の利益』、川久保晃志氏や長尾伸一氏が検討したJ・ビーティ論、最近関西学院大学に所蔵された「度量衡統一論」の竹本洋氏による検討<sup>28</sup>、などはあるものの、『著作集』第5・6巻に収められたステュアートの論説は、ほとんど検討されていない。ステュアートのインド論を有するS.R.センの1957年の研究書以来停止しているとも言える。ポリティカル、メタフィジカル、クロノロジカルとの分野の中で、拙著の第2・3章の原型となった⑩と②とは、ポリティカルな側面における『原理』以外の領域の拡大に対して、いく分歩を進めたと考えている。また、③④、③⑤、③⑥(収録されなかった③⑦も含めて)は、第4・5・6章の原型であるが、『著作集』に収められていないステュアートの仕事に取り組んだものと考えている。

<sup>26</sup>1999年11月に経済経営学会に提出した資料4の2つの計画書を参照。第一は、ステュアートの時代を輪切りに時系列に追いかけてみようとしたものであったし、第二のものは、ステュアート理論の形成史的研究を目指したものとなるはずだった。その構想には、三つ子の魂の喩えにもあるが、山之内靖、淡路憲治と言った、院生時代に読んだ書物の構想が影を落としたとも思われる。この当時、すでに第1章に相当する部分はかなり出来上がっていたが、にわかには身辺が忙しくなり、前後の数年間、ファイルをいく度か更新することはあったけれども、経済学史研究会で二度にわたる報告はさせていただいたもの(合宿2001年8月)「ジェームズ・ステュアートをめぐる人物群」、166回(2004年4月)「ステュアートの系図作成から見えてくるもの」、結局エントリを具体化することができなかった。再三にわたり著書公刊を促していただいた上出健二郎先生に感謝します。

<sup>27</sup>『原理』の梗概を作成しようとも試みた。学部のゼミナールでの指導教官佐藤金三郎先生は、1968年に出された自著の「あとがき」で、自著第二部のできばえについて述懐されている。

2006年に拙著の出版の相談にのっていただいた奥村茂次先生は、書物のタイトルについても示唆を与えていただいた。改めてお礼申し上げます。

<sup>28</sup>竹本洋「度量衡の世界的統一——経済と啓蒙との一交差点——(田中秀夫代表:「近代イングランドと近隣英語圏における啓蒙思想と経済学形成の相互関係の研究」、平成16、17、18年度日本学術振興会研究補助金、研究成果報告書、平成19年3月)

次に第二の集合、第1章の作成にはなくてはならないものだった伝記的なドキュメントでは、George Chalmers, *Anecdotes of the Life of Sir James Steuart, Baronet; born 1712; died 1780, in the 6th vol. of Steuart's Works Political, Metaphysical, & Chronological, of the late Sir James Steuart of Coltness, Bart*, London, 1805.を始め、the right Hon. the Earl of Buchan, *Memoirs of the Life of Sir James Steuart Denham, Baronet; in Archaeologia Scotia; or Transactions of the Society of Antiquaries of Scotland. I. [1792], Original letters from the right honourable Lady Mary Wortley Montague, to Sir James & Lady Frances Steuart; also, Memoirs and Anecdotes of Those Distinguished Persons*, Greenock, 1818. Andrew Kippis, *The Life of Sir James Steuart Denham of Coltness and Westshield, Bart, in The Coltness Collections M.DC.VIII.-M.DCCC.XL., Glasgow, 1842. Selections from the Family Papers Preserved at Caldwell*, 3vols, 1854.などが豊富なバックグラウンド材料を提供しており、いくつか出版されているスコットランドの人名辞典のうち、Chambers, Robert, *A Biographical Dictionary of Eminent Scotsmen. in four volumes. Originally edited by Robert Chambers. New Edition, Revised under the care of the publishers. with a supplemental volume, continuing the Biographies to the present time. by the Rev. Thos. Thomson, author of "The History of Scotland for the use of schools," etc., with numerous portraits. Glasgow, Edinburgh, and London, 1855.*も、ステュアートの背景をあぶり出すのに有用であった。③は、ステュアートの甥の手になるものとして、拙著の第4・5・6章の補助史料として利用されたが、こうした伝記的なドキュメントは、ステュアートの数多いミッシングリンクを探索するのにまだまだ利用できるものである。

第三の集合に属する未公刊物については、最近奥山忠信、古谷豊の両氏によって、精力的な復刻ならびに分析作業が進行している。②は、今後のステュアート研究の中核となるはずの『コルトネス文書』(*Coltness Papers*)の見取り図と考えていただきたい。この見取り図を手掛かりにして、本格的なステュアート研究を進めたい。

最後に、⑤であるが、これは分野としては、伝記的研究に属すべきものである。ロスの新著は、汲めども尽きない泉のようなもので、本来アダム・スミス研究の有力な手段であるはずだが、ステュアートの研究にとってもほぼ同等の価値を有するのが判明したと考えている。改めて、イギリスの伝記的研究の奥深さを思い知らされた。今回その余裕はなかったが、デイヴィッド・ヒュームの伝記や、特にヒューム書簡集との対照を行えば、もっと興味深い情報が得られたのではないかと考えている。

#### 4. おわりに

今回、拙著に収録されなかったもの、③、⑬、⑭、⑯、⑰、⑱、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、

⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖などは、通常の本物なら付録とでも位置づけられるものであろう。

㉗や㉘は、第2・3章の補論的性格を持ち、㉙は、第4・5・6章の補論である。㉚は、伝記的な資料を駆使しつつ、ステュアートの著作を発掘したもので、㉛と対をなす。㉜は、書誌的な研究に分類されるものであろう。㉝と㉞は、学会展望ないしは研究史の整理である。㉟と㊱とは、㉞の派生したものでいわゆるビブリオグラフィーである。㊲は、第1章のもとになったものとも言えるが、伝記的研究と分類されよう。㊳から㊴までは書評である。

しかし、あまり評価されることはないけれども、これらは、歴史研究にとっては極めて重要なものと考えている。場合によっては、特にビブリオは、拙著の後半部分に組み込まれるべきであったと考えている。

ジェイムズ・ステュアート研究史略年表

小林昇	『重商主義の経済理論』	1952		
Sen, S.R.	The Economics of Sir James Stewart.	1957		
小林昇 Skinner, A.S.	「ステュアート・スミス・リスト」 An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy. in 2 vols.	1966 → 1966	『小林昇経済学史著作集V』	1977
川島信義	『ステュアート研究』	1972		
小林昇	『小林昇経済学史著作集X』	1988		
田添京二	『サー・ジェイムズ・ステュアートの経済学』	1990		
小林昇	『最初の経済学体系』	1994		
Yan, H.-S.	The Political Economy of Trade and Growth.	1994		
竹本洋	『経済学体系の創成』	1995		
大森郁夫	『ステュアートとスミス』	1996		
Skinner, A.S.	An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy. in 4 vols.	1998		
Tortajada, Ramon(ed.)	The Economics of Sir James Stewart.	1999		
小林昇	『経済学史春秋』	2001		
小林昇	『山までの街』	2002		
小林昇	『歴世ー小林昇全歌集一』	2006	奥山忠信訳『ジェームズ・ステュアートの貨幣論草稿』	2004
渡辺邦博	『ジェイムズ・ステュアートとスコットランド』	2007	奥山忠信、古谷豊訳『『経済学原理』草稿 第三編貨幣と信用』	2006

## 仕事の分類

	各論的研究	書誌的研究	伝記的研究	翻訳	その他 (総論、書評)
1986	◎16				○1
1987	○17			○9	
1988				○5 ○10	
1989		○18		○6	
1990	◎2	○20 ○19		○13	
1991				○11	○40
1992				○7	○23 ○41
1993					
1994		◎25 ○26			
1995					○42
1996		○27			
1997		○28			○43
1998		○31		○8	○44
1999	◎30				
2000	◎32	○34	◎33		
2001	◎36		◎35		
2002					
2003			○37		
2004					
2005	○38				
2006					
2007	◎第1章 (書き下ろし)				
2008		○39			

←『小林昇経済学史著作集X』  
 ←『小林昇経済学史著作XI』  
 ←田添京二『ジェイムズ・ステュ  
 アートの経済学』

←小林昇『最初の経済学体系』  
 ←竹本『経済学体系の創成』  
 ←大森『ステュアートとスミス』



## 資料3

## 研究業績一覧

## 〈著書〉

- ① 経済学の古典的世界 (竹本洋 編)、共著、昭和61年3月、昭和堂、第2章pp. 41-61
- ② 古典経済学の生成と展開 (田中敏弘編)、共著、平成2年4月、日本経済評論社、第3章pp. 49-71
- ③  In Collaboration With Ianik Marcil ,Bibliography, in Tortajada,Ramon (ed.,*The Economics of Sir James Steuart*, (With a Forward by A. Skinner)、共著、1999、Routledge, pp.297-317
- ④ 『ジェイムズ・ステュアートとスコットランドーもう一つの古典派経済学ー』、単著、2007年4月、ミネルヴァ書房

## 〈訳書〉

- ⑤ エルティス「サー・ジェイムズ・ステュアートの法人国家」、コリソン・ブラック編著、経済思想と現代 (田中敏弘監訳)、共訳、昭和63年3月、日本経済評論社、第3章pp. 55-94
- ⑥ スキナー「サー・ジェイムズ・ステュアート」、スコットランド啓蒙と経済学の形成 (田中敏弘編)、共訳、平成元年10月、日本経済評論社、第9章pp. 237-275
- ⑦  J. ステュアート『経済の原理ー第3編・第4編・第5編』(小林昇監訳)、共訳、平成4年9月、名古屋大学出版会、第3編の一部と第5編pp. 553-699 & 806-843
- ⑧  J. ステュアート『経済の原理』第1編・第2編(小林昇監訳)、共訳、平成10年3月、名古屋大学出版会、第1編pp. vii-149 & 485-531

## 〈翻訳〉

- ⑨  [J. ステュアート] 『スコットランド・ラナーク州の利益についての諸考察 (上)(下)、共訳、昭和61年12月、昭和62年8月、佐賀大学経済学会「経済論集」19/2・3、20/2、pp. 99-127 & pp. 43-79 解説を付す
- ⑩  ジェイムズ・ステュアート『政治経済の諸原理に関する研究』第3編「貨幣と鑄貨について」、共訳、
- ⑪ 昭和63年5、9、12、平成3年、5月、大阪経済大学「大阪経大論集」189, 184, 185, 186, 187・188, 189、全部分共同訳
- ⑫ ドナルド・ウィンチ「アダム・スミス問題再訪」、単訳、平成2年9月、奈良産業大学「産業と経済」5/2, pp. 1-15
- ⑬  [J. ステュアート] 『ラナーク州の利益についての諸考察 (上)(下)、共訳、平成2年

12月、平成3年6月、奈良産業大学「産業と経済」5/3、6/1、pp.69-88 & 41-57  
上記翻訳の底本を初版としたもの

- ⑭ J. ヴィント 貨金基金説・理論的進歩と新しい事実、単訳、平成7年3月、奈良産業大学「産業と経済」9/4、pp.69-97

〈論文〉

- ⑮ (福田文庫のチャイルド、単著、昭和59年3月、大阪市立大学経済学会「経済学雑誌」84/6、pp.40-49)
- ⑯ 「サー・ジェイムズ・ステュアート」『ラナーク州の利益に関する諸考察』について、単著、昭和61年10月、桃山学院大学「経済経営論集」28/2、pp.17-38
- ⑰ J. ステュアート穀物政策論の成立過程—『ラナーク州の利益』の基本構成—、単著、昭和62年10月、桃山学院大学「経済経営論集」29/2、pp.59-83
- ⑱  ジェイムズ・ステュアートの諸著作について、単著、平成元年10月、経済資料協議会「経済資料研究22」、pp.1-9
- ⑲  G. チャーマーズまでの J. ステュアート、単著、平成2年3月、福島大学経済学会「商学論集」58/4、pp.3-24
- ⑳  「ステュアート小伝」のオーサーシップをめぐって、単著、平成2年9月、奈良産業大学「産業と経済」5/2、pp.33-49
- ㉑ 『スコッツ・マガジン』のアダム・スミス『道徳感情論』の出版まで—、単著、平成4年6月、奈良産業大学「産業と経済」7/1、pp.29-46
- ㉒ 18世紀スコットランドの雑誌とアダム・スミス、単著、平成4年9月、阪南大学「阪南論集 社会科学編」28/2、pp.271-280
- ㉓  ジェイムズ・ステュアート—課題と展望—、単著、平成4年10月、経済学史学会(九州大学出版会)、pp.45-50
- ㉔ 第2次『スコッツ・マガジン』のアダム・スミス、単著、平成4年9月、奈良産業大学「産業と経済」7/3、pp.37-55
- ㉕ 「コルトネス文書」について、単著、平成6年6月、奈良産業大学「産業と経済」9/1、pp.37-54
- ㉖  Studies on Sir James Steuart in Japan — After the Second World War to the present (1992) —、単著、平成6年11月、「産業と経済」創立10周年記念論文集(奈良産業大学)、pp.19-35
- ㉗  ポール・シャムレーのステュアート研究、単著、平成8年3月、奈良産業大学経済学会「産業と経済」10-2/3、pp.45-62
- ㉘  ジェイムズ・ステュアートの『ラナーク州の利益』初版から著作集版へ、単著、平成9

- 年6月、奈良産業大学「産業と経済」12/1, pp. 23-38
- ②⑨ マルチメディアと経済学関係情報、単著、平成10年12月、奈良産業大学「産業と経済」13/3, pp. 331-353、
- ③⑩ 1779年のスコットランド蒸留業問題をめぐる若干の新聞記事について—晩年のジェイムズ・ステュアートと内国消費税問題、単著、平成11年10月、奈良産業大学「産業と経済」14/2, pp. 1-15
- ③⑪ Bibliographie de James Steuart (avec Ianik Marcil), 11-12/1998、*Economie et Societes, Serie P.E.*, no.27, pp.331-353
- ③⑫ 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』におけるJ.ステュアートの小論について、単著、平成12年3月、奈良産業大学「産業と経済」14/3・4、奥村茂次教授退任記念号, pp.
- ③⑬ バハン伯のステュアート伝、単著、平成12年6月、奈良産業大学「産業と経済」15/1, pp. 1-20
- ③⑭ 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』における蒸留業関係記事、単著、平成12年9月、奈良産業大学「産業と経済」15/2, pp. 69-81
- ③⑮ 「アダム・スミスとジェイムズ・ステュアート—イアン・ロスの新しい『アダム・スミス伝』をジェイムズ・ステュアート研究の手がかりとして読む—」、単著、平成13年9月、奈良産業大学「産業と経済」16-1, pp. 15-42
- ③⑯ 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』におけるジェイムズ・ステュアートの蒸留業論、単著、平成13年9月、奈良産業大学「産業と経済」16/2, pp. 105-113
- ③⑰ ジェイムズ・ステュアート関係人名録、単著、平成15年6月、奈良産業大学「産業と経済」18/2, pp. 285-312
- ③⑱ James Steuart's response to the backward area in Scotland、単著、平成17年3月、大阪市立大学経済学会「経済学雑誌」106/3, pp. 92-110
- ③⑲ 『コールドウェル文書』をめぐって、単著、平成20年3月、アダム・スミスの会会報75, pp6-13

## 〈書評〉

- ④⑩ 田添京二著『サー・ジェイムズ・ステュアートの経済学』、単著、平成2年5月、週間読書人、5月21日号
- ④⑪ 田添京二著『サー・ジェイムズ・ステュアートの経済学』、単著、平成3年10月、経済学史学会年報29号, p44
- ④⑫ 小林昇著『最初の経済学体系』、単著、平成7年10月、経済学史学会年報33号, p. 187
- ④⑬ 大森郁夫著『ステュアートとスミス—巧妙な手と見えない手の経済学—』、単著、平成9年11月、経済学史学会年報35号, pp. 150-151

- ④ (Book Review) ,James Steuart, *An Inquiry Into the Principles of Political Oeconomy* (edited by Andrew.S.Skinner With Noboru Kobayashi and Hiroshi Mizuta), 4 Vols, London, Pickering & Chatto,1998. ,31,winter, 1998. 単著, HISTORY of Economic Thought Newsletter, pp.27-29

〈辞典項目〉

- ⑤ ジョサイア・チャイルド、ホッジス、等の項目、2000年、経済学史学会辞典編集委員会 『経済思想史辞典』、丸善。

\*以上は私のステュアート研究開始以降のものに限定している。

資料 4

計画書

奈良産業大学経済・経営学会 会長 西口直治郎殿 1999年11月24日

『ジェイムズ・ステアート研究(仮称)』経済経営研究叢書 出版計画概要書

渡辺邦博

以下のような既発表論文をもとに、新稿を付加して、研究書を出版したいと思います。  
内容目次は、大要次のようなものですが、ご審議方よろしく心願いたします。

案 その1

序 ステュアート研究の諸類型

一セン以来の研究書の類別と自著の位置付け・・・

大森・竹本、トルタハダ、スキナーの集注版

◎ ステュアート『経済の原理』の形成と展開をめぐる問題群

1. 『原理』初版第1・2編
2. 『原理』初版第3-5編
3. 1760年代後半のステュアート
4. 1770年代のステュアート
5. 挫折した『原理』フランス語版、1781-84年
6. セノヴェールのフランス語版
7. ステュアート『著作集』(1805年)への道

- ◎ 『原理』初版から『著作集』へ
- ◎ ステュアート『ラナーク州の利益』
- ◎ チャーマーズまでのステュアート
- ◎ ステュアート研究の課題と展望1992-95年（英文）

付録1. 文献目録

付録2. いわゆる『コルトネス文書』について

あとがき

## 案 その2

序章 ステュアート研究の方法

第1章 1760年代のステュアート、ステュアートのスコットランド開発論・・・『ラナーク州の利益』を中心として・・・

第2章 ステュアートとインド

第3章 ステュアートとアメリカ植民地問題、新発見の9通の書簡を中心に

第4章 ステュアートとスコットランド蒸留業問題、『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』の記事をめぐって

第5章 ジョージ・チャーマーズによる「ステュアート小伝」の成立

終章 むすびにかえて『コルトネス文書』の紹介をかねて、今後の研究展望

付録1 バハン伯のステュアート伝

付録2 『コルトネス文書』の概要、またはステュアート研究文献目録

ジェイムズ・ステュアート略年表

索引